

コメント：マージナルな存在へのまなざし

小野賢一

1 近藤報告へのコメント

近藤喜重郎氏の報告「東方キリスト教の超域的な人の繋がり—アントニイ・フラポヴィツキイと在外ロシア正教会の事例から—」は、社会主義国の聖職者や亡命聖職者といった従来の教会史の中心から外れたところにいる周縁の聖職者の状況が明らかにされた報告であった。東方正教会のなかのギリシア正教会は、1054年にカトリック教会と相互破門で分裂して以来、約1000年ぶりにお互いに破門を解き、和解した。その時、ロシア正教会はカトリックとの和解を認めなかったが、ローマ教皇の下で一枚岩に近いカトリックと違い、東方正教会は、緩やかな結びつきで成立しているという歴史的な背景が本報告で示された¹。

(1) 「国家と教会」

「国家と教会」の問題は、国制史・教会史の主要なテーマとして扱われてきた²。東方正教会は、国家権力からの個人の宗教・思想・信条の自由へと展開される近代の自由主義、民主主義の起源に直接つなげて説明することが難しいため、世界史の教科書でも十分に取り上げられていない。だが、キリスト教徒を相手に争う西ヨーロッパの教会と、しばしば反キリスト者と争うことになる東方正教会を同列に置いて比較することはそもそも不可能である。ソ連時代のロシア正教の総主教は、反キリスト者の暴君のごとき人物としばしば向き合わねばならなかったからである。反キリスト者の支配を受けていた点から推測して、ロシア正教会は国家権力の捕囚のもとに置かれ、世俗からの自立の不十分な墮落した教会と見做されることもあるかもしれない。だが、ロシア正教会は、革命の暴力に対する感嘆すべき忍耐力を持って立ち向かい、その結果、旧約聖書のヨブ記のように、ソ連の支配下で耐え忍ぶグループと、宗教的信念を

曲げず、ソ連と真っ向から対立し、ディアスポラとして国外をさまよう亡命教会（在外ロシア正教会）のグループに分かれたという事実が近藤報告では明らかにされた。亡命教会は、西洋から辺境と見做されたロシアのさらに辺境に位置づけられるグループである。「国家と教会」の対立という従来の見方を超えて、国家や教会制度から排除されたマージナルな存在へ向ける真摯なまなざしでもって、見つめ直さなければ、到底理解することができないだろう。

ソ連時代の列聖一つ取り上げても、宗教の国家権力への従属の悪しき事例なのか、あくまで国内の信者のために、耐え忍んでの殉教なのか、難しい問題であり、一筋縄では捉えられない。ロシア正教会史研究の奥行きが感じられる。

これまで当研究所のワークショップで取り上げたフロンティアヒストリー、「複合国家」研究、「帝国」研究といった国制史研究の最新の研究成果に加えて、「国家と教会」の枠組みを大きくはみ出すような「ディアスポラ教会」の問題について検討することは、ソ連時代の固有の問題というだけではなく、教会史・国制史全体を再考する手掛かりとなるのではないだろうか。

(2) 超域的なつながりからのアプローチ

国境を越えて活動するディアスポラ教会に光をあてた近藤報告は、従来の「国家と教会」の枠組みに収まりきらない新しさを持っているが、さらに超域的につながる人と人の絆（コミュニケーション）や宗教心性を解明するという教会史の新しい潮流に応える報告であったといえよう。人と人の絆の問題については、ロシア正教会と在外ロシア正教会の間の極めて困難な状況が近藤報告では描き出された。人と人の絆を取り結ぶことの困難な状況については、上條報告でも鋭く描き出されている。

2 上條報告へのコメント

さて上條敏子氏の報告「ヨーロッパ中世に俗語で書く一女性たちの先駆的試み」（論文集収録の原稿作成の際に「ヨーロッパ中世に俗語で書くこと：マルグリット・ポレート処刑とその背景事情」と改題）に対してコメントしたい。上條氏は、世界史

の教科書などでは、ほとんど触れられていない俗人(一般信徒)や女性といった周縁の人々を社会史の方法で研究されている。最近では、多くの若き秀才たちが、かつて上條氏が博士論文のテーマとして取り上げたベギンと呼ばれる半聖半俗の女性たちに目を向け、どっと押し寄せるようになったが、疑いなく上條氏がこの分野の先駆者である³。

(1) 中世の俗人の宗教心性の高まり

シティ(city)の語源のキウィタースは、もとは古代ローマ帝国の管区や都市を意味したが、中世に入り、司教座都市を意味するようになった。紀元千年頃には、司教などの高位聖職者が多くの都市を支配していた。11世紀末に聖地エルサレムへの十字軍運動が始まり、巡礼熱がいつそうさかんになり、俗人の宗教心性は高揚した。

12世紀に俗人への司牧(魂の世話)の重要性が強く認識され、司牧重視の理論が生み出された。しかしながら、俗人は聖職者にとって、羊飼いに司牧される主体性のない従順な羊のような存在と見做されることが多かった。

中世後期(13世紀～)に入ると、都市における実権は、聖職者の手から都市の俗人(一般信徒)の手に移るようになってきた。自治都市も増加した。俗人たちには、高まった宗教的情熱のはけ口が必要であった。このような時期に、俗人への司牧(魂の世話)を理念だけでなく、実践に移すことのできる托鉢修道会が生まれた。この托鉢修道会が俗人や女性の宗教的情熱を受けとめ、聖職者と俗人の宗教上のコミュニケーションの媒介となった。托鉢修道会は、前述のベギンという半聖半俗の女性たちの宗教的情熱も受けとめた。これについては、かなり研究が進んでおり、よく知られている。上條報告で扱われたのは、まだあまり知られていないこの先の問題、すなわち女性の主体的な活動という宗教心性についてである。

(2) 聖体と聖血の都市儀礼—世俗化されたコミュニオン—

中世後期の都市では、自治を始めた俗人と聖職者はともに都市の城壁のなかの平和を望んだ。都市の平和の儀礼としては、紀元千年頃の聖人崇敬を伴う神の平和の贖罪の儀礼が知られている。これは高位聖職者が主導した運動である。中世後期の都市の

贖罪は、聖人を介さず、神との直接の交流を希求する神秘主義の影響を受け、聖体への崇敬がさかんになった⁴。都市の平和を願う聖職者と俗人の宗教上の分かち合いの精神をよりよく反映するのが、聖体の儀礼への俗人の参入であった。都市共同体の団結のために、聖職者と俗人はともに聖体を分かち合ったのである。都市の内部の宗教上の拠点を、聖体を担いでねり歩く行列（プロセッション）の儀礼が聖職者と俗人によって熱心に行われたのも、俗人の宗教的情熱を聖職者が受けとめ、聖体を都市全体で分かち合うためであった。

比較都市史研究会における畑奈緒美氏のパンとワインによる都市の外来者へのもてなしに関するきわめて興味深い研究⁵から私が着想を得たのは、このもてなしは、近代的な食事のもてなしというよりも、宗教的なもてなしではないかということであった。つまり、パン、すなわちキリストの肉体（聖体）と、ワイン、すなわちキリストの血（聖血）によるもてなしの儀礼は、都市空間全体を、コミュニオン（聖体拝領）を行う聖なる空間（聖堂）と見做し、外来者を都市のコミュニオンに参入させ、友好をはぐくむ儀礼ではないかと筆者は考えた⁶。ゆえに、この都市の聖体・聖血のもてなしの儀礼は、世俗化されたコミュニオンといえるかもしれない。終身雇用の慣行が役所や一部の企業に見受けられる我が国と比べて、西洋では転職が比較的が多いとされる。如何にして人間関係を築いているのだろうかという疑問が生じる。おそらく、勤務先がかわっても、教会のコミュニオンで聖体を分かち合い、人と人のきずなを結び、深い人間関係を築くという文化的な伝統が、かたちをかえつつも、中世から継承されているのではないだろうか。

(3)中世後期の活動的生活と観想的生活：中世盛期との比較

ベギンと呼ばれる半聖半俗の女性たちが、中世後期に聖体崇敬をとりわけ熱心に行ったことは、上條氏の研究以後、我が国でも知られるようになった。托鉢修道会とベギンは、羊飼いと従順な羊のような一方的な支配と被支配の関係にあったわけではない。紀元千年の神の平和の都市の贖罪の儀礼には、司教などの活動的生活(司牧)を中心に行う聖職者のかたわらに、必ず厳格な内的観想生活を送るベネディクト修道院や参事会教会の聖職者が控えていた⁷。つまりリーダーシップを発揮する活動的生活(司

牧)と宗教的な威信を高める内的観想生活(修道生活)の両方が必要とされた。両者は相互補完的であった。中世後期の托鉢修道会はリーダーシップを発揮する活動的生活(司牧)を担い、ベギンの女性たちは、宗教的な威信を高める内的観想生活を行い、都市の聖体の儀礼を完全なものとした。そして中世後期の都市を聖なる空間とし、かつては修道士や律修参事会員が担っていた宗教上の平和を実現する一方の主役(内的観想生活)を半聖半俗の女性が担っていたといえ、言い過ぎであろうか。

(4) 国境のはざまでもがき苦しむポレートの復権

マルグリート・ポレートの悲劇は、フランス、フランドル、神聖ローマ帝国の権力が複雑に絡み合う境界地域で起きた。上條報告によるとポレートの故郷に近いヴァランシエンヌ(現在はフランス領)は、当時、川によってフランスと神聖ローマ帝国に分断されていたという。ポレートの悲劇は、従来のナショナルヒストリーでは捉えきれない辺境の権力のはざまでも起きた悲劇であった。しかも、ルネサンスという人間性を開花させるとされる輝かしい時代の入り口で、ポレートは異端にされたのである。英仏の王朝の争いのはざまでも火刑とされたジャンヌ・ダルクは、ナポレオンの時代にナショナルヒストリーのなかで生き残ったが、国境のはざまでもがき苦しむポレートは、歴史の闇のなかに葬り去られてしまった。ポレートの偉大な業績を丹念に掘り起こされた上條氏の報告は、今後のルネサンス、文芸、心性、ジェンダーなどの研究のみならず、トランスナショナルヒストリーやフロンティアヒストリーなどのグローバルな観点からの研究にも刺激を与え、新たなアプローチを切り開く出発点となるに違いない。

3 総括

近藤報告では、亡命聖職者アントニイ・フラポヴィツキイという周縁へ追いやられた者へのあたたかいまなざし、上條報告では、マルグリート・ポレートという闇に葬られた女性へのあたたかいまなざしが印象的であった。ふたりの報告に共通するのは、歴史における弱者の復権と言ってよい。その意味で、長年、我が国の学会の主流であったグレゴリウス改革史観などのエリート聖職者の事蹟中心主義を超克し、「マージ

ナルな存在へのまなざし」の歴史学、すなわち 21 世紀にふさわしい新しい歴史学を模索するというシンポジウム企画者の当初の目的は、その第一歩を踏み出すことができた。報告を引きうけてくださった二人の先生と本ワークショップに参加して下さった方々にお礼申し上げたい。

-
- 1 近藤喜重郎『在外ロシア正教会の成立—移民のための教会から亡命教会へ』成文社、2010 年。
 - 2 堀米庸三『ヨーロッパ中世世界の構造』岩波書店、1976 年。森安達也『近代国家とキリスト教』平凡社、2002 年。
 - 3 上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』刀水書房、2001 年。
 - 4 聖体への冒瀆は許されざる行為とされる。ユダヤ人が聖体を冒瀆したという風説がしばしば悪用され、彼らの迫害につながった。Cf. R.C. Stacey, *From Ritual Crucifixion to Host Desecration: Jews and the Body of Christ*, *Jewish History*, Vol.12, No.1, 1998, pp.11-28.
 - 5 畑奈保美「都市のぶどう酒贈与:—15 世紀都市ブルッへの事例より—」『比較都市史研究』37(1-2)、2018 年、14-15 頁。畑奈保美「15 世紀フランドル都市ブルッへのぶどう酒贈与帳簿: フランドル都市とブルゴーニュ宮廷の関わり」『ヨーロッパ文化史研究』19、2018 年、97-114 頁。
 - 6 聖体と聖血の儀礼への女性の参入というテーマは、近年のジェンダー史研究の主要な課題のひとつとされている。Caroline Walker Bynum, *Wonderful Blood. Theology and Practice in Late Medieval Northern Germany and Beyond*, Philadelphia, 2007.
 - 7 小野賢一「11 世紀中葉の聖レオナルド崇敬と聖堂参事会の改革」『愛大史学—日本史学・世界史学・地理学—』第 26 号、2017 年、53-68 頁。